

あの頃～通学路で

嶋田正文

一年生か二年生だったか遠い記憶の糸を今たぐってみても定かじゃない。教室のあった棟の位置もうろ覚えなのである。但し三学年のときでなかったことは確かだ。昭和43年度卒業記念アルバムを開くと洋も良二も僕もクラスが別々だから。事の始まりはよくおぼえている。三人が同じクラスだった時の或る昼休み、洋が自席で突っ伏して弁当箱におおいかぶさっていた。背中がワナワナ震えている。実は今さっき、鳥肌立つほどの期待感をぶち壊す絶望に打ちひしがれて一声、「ああっ」と悲鳴的にうめくや飯を食い残しのまま学制服の腕に顔をうずめていた。立てば175センチ以上あるスマートな長身だ。それが亀の子的に縮こまっている。どうしてこんなザマに陥っているかと言えば、そもそも洋自身が苦しく切ない胸の内を、僕と良二に打ち明けずにいらなかった為だ。

「俺、隣の前を通りかかるだけで…」

先日、洋は思いあまって我々にこう告白した。そわそわする一方の様子をいぶかった良二と僕の誘導尋問に乗ったのだ。根が正直者の洋いわく、「胸がバクバクする。足がすくんで、とてもじゃないがそっちを見られない」

そっちとは、隣の教室のことだ。隣に近付くと、いやこれからその前を通らなくてはと思うだけでも急に緊張し、背筋が冷やっとしてどうしてよいか分からず、顔をそむけてぎこちなく廊下を通過するのだそう。それが繰り返され、毎日の苦行である。

かわいそうに洋は、体操の授業やトイレの往復、あるいは登下校で隣のクラスの前を通るたびに心臓がバクバクと跳ね躍り破裂しそうになる。平凡ながら順調であった洋の高校生活が、或る日を境にして突如、思いもよらぬ緊迫の虜囚状態になってしまった。我々にそう訴える洋の息づかいは切れ切れになり、当人のわななく心情が本物なのは明白だった。洋に覗き出るこういう巧まぬ人の良さを、我々は大事にしたかった。

良二と僕は、洋の告白を受けて以来、頼まれはしないが機会さえあれば偵察をした。隣クラスの様子は通りすがりに廊下側からいくらでも眺められる。なるほど、クラスの真ん中辺りに真っ赤な頬ぺたが林檎なみの女子がいる。あの娘が目下当人の存ぜぬ事とはいえ、われわれの仲間洋を息も絶え絶えにしている。名前は江原京子だ。

彼女を視認した我々の最初の感想は兩名とも、「意外に小太りだな」である。洋の審美眼をくさす訳でなく正直、健康優良児そのものに見えたのだ。全身にいかにも豊饒な娘らしい張りがあり、みずみずしく果実的にふっくらしている。が、一番良いのはその眼に陰が無く、どこか温かな湯気が立ち昇っている感じがしたことだ。

「ゆったりと、おおらかそうな女子だな」やがて良二が真顔で言った。

「素朴な感じもする。気儘なところが無さそうで」と僕は応じた。

後で洋にそれらを告げると意外そうに驚いたが、われわれ二人の目を見、からかわれていないと知るや洋の顔が安堵でくしゃくしゃとばかり崩れた。まるで自分自身が最上等と褒められた如くはにかみ、耳まで真っ赤に染めて、

「うーん」と息を弾ませて当人こそばゆげに一言、「そういう子なんだ」と、のろけて知られたくない警戒心をすっかり解き、満面笑みを隠さなかった。無理もない。今ようやく片思いを多少でも分かち合ってくれる仲間が出現した訳だ。むろん洋へ、いつから好きなのだ、などと問う野暮はぬきである。以

後、我々は洋の目代わりを買って出た。単に洋を喜ばす為にちよくちよく京子林檎（ニックネーム）の観察報告をした。片恋の真最中の洋にとっては、ごく些細な情報でもこの上ない慰めになる。その断片だけで洋が半日幸せで居られる日もあるのだ。そうやって我々は期待される以上の強い味方になって居た。

即ち、洋がひとりで悩む別問題にも関わることになった。すでに洋の気付くところ、京子林檎へしきりに気安く（洋によれば極めて馴れ馴れしく）話しかける男子生徒が一人いる。なにか冗談を言っでは京子林檎をコロコロ笑わせている。それも、机のすぐ前からだ。畜生、そこがその男子の席だ、と洋が我々に漏らした。

ふ一む。内気でまともに隣教室を見ることもならぬ洋に何時そんな観察ができたのか知らないが、これが遠くからじりじり洋を悩ませたのは間違いない。洋の神聖不可侵な京子林檎に対し、その男子のいけ図々しさ、無礼で我慢ならぬ眺めであったらう。

「だったら、そ奴をプール裏にでも呼び出して、京子林檎に喋り掛けるな、気がむしゃくしゃすると警告すればいい」では暴論すぎ、毒にもアドバイスにもならない。

片思いというのは、金輪際だれにも知られたくない感情の最たるものだ。それは自らの思春期をふり返れば大方判る。好きになれば好きになる程その人の視野内に立ち入りたい、気付かれないと思いたい焦がれる気持と、その一方では、まぶし過ぎて相手の前からとっとと逃げ出したい衝動、これら二つが相矛盾し合いながら入り組み、心の中心に同居する。年頃の少年が一度は乗り越えねばならぬジェリコの壁（聖書）だ。そこを過ぎられれば男の成長の証だが、まだその最中にある者にとってこんな苦しい相克はない。

往々にして行動と意思との落差が実にちぐはぐになる場合が多い。それを第三者的に脇から眺めると、矛盾のものが透けて見えるだけに歯がゆい。で、僕よりずっと物事の処理にてきぱきしている質の良二が、洋の願望を先取りする形で早速、隣クラスの該当男子をマークした。というか、もっと情報を得る為の行動に出た。暫くのあいだ隣へ遊びに行っでは目を細めニコリ笑みながら目星を付けた女の子にそれとなく聞き出したのだ。必要ならば笑顔で以て相手の内懐へ一足飛びに入れる、タフで頼りになる少年である。ちなみに良二は未婚の社会人の姉がいた。少年ながら姉と二人きりで一軒家に住み、遠隔地赴任の父親の世話で母親もまた不在の留守宅に居て、いわば姉を守る一家の主人役だ。ストレートな説得力と大人びた目を持ち、こういう件はこの手に限ると判断したらしい。

当時、一クラスが約五十名編成中の男女比率を見ると、女子は少なく七、八人だ。が、女子の巡らす素早い瞳を逃れられる秘密は何もない筈である。図体ばかりでかく細やかな観察力に欠ける同年男子より、物事は性緻密な女子に習うべきなのだ。やがて良二が得てきた心待ちの結果は、「やつは支障なし、無視してOK」であった。

どう支障無しなのかを僕が問い返すと、「あいつは、京子林檎と同じ学区内で中学校でも同級生だ」と良二は答えた。「だから小学校もいっしょだ。家も近い者同士で、ずっと同じ町内で育っている」

それがどうして安心か、逆も可ではないかと更に問うたら良二が当然のように、

「お互いが子供時代をよく知っている間柄だけ、今さら何かがときめくかよ。単なる演垂れ幼なじみだ。クラスの女の子達がそう見ているのだから間違いない無害、無臭」と、ぱっさり結論し、ケケケツと陽性の幅広大口で笑った。

洋はそれに釣られて気弱く笑んだが、まるきりの天下晴れ顔でもなかった。

「おい色男しっかりしろ」良二がバシッと洋の背中を叩いた。「京子林檎は、まだ誰も好きな人が居な

いようだぞ。だからお前にも充分チャンスはあるって」

でも幼なじみの仲って、そういうものだろうか。僕は私^{わたくし}ごとを振り返ってみた。そういえば小学五年の同じクラスに可愛い子が居て好きになった。或る日その子が二人掛けの机の真ん中に見えない境界線を指で引き、きつい口調で、「ここからこっちへは鼻水を飛ばさないで」と僕に命じた。その時の冷ややかな声音をよく覚えている。その子とは中学校も一緒だったし中一まで好きだった。その淡い気持ちはまだ僕の中に残っている。けれど、「今さらときめくかよ」と良二に断言されてみて確かな事は、その類の答えって、隣から鼻水を飛ばされた経験のある女の子にとって百点満点の正解だろう。いや別に、京子林檎さんは見えぬ境界線を引く如き残酷な女の子には思えなかったが。

ところで悩める洋本人だが、どちらかという僕ら二人について告白した事を悔やまずにも非^{あら}ず、の風もあった。我々が推しすすめる予測外の惜しみない助力に、洋はややもすると、おっかなびっくり及び腰だ。偵察し過ぎなのか微に入り細^{うが}を穿った我々の報告が、かえって恐怖心を煽ってしまったらしい。洋の頭脳は、京子林檎に関する情報錯綜で埋まり混乱したようだ。その名前が出ただけで我々の前でぶるってしまうのだ。甘い名（京子林檎）の響きが、まるで耳に触れた高圧電気ショックみたいに洋を飛び上がらせた。

こいつ本当に^{おのの}怖いっているな、と改めて思った程に、「もういいよ。二人とも、や、やめてくれ」と、両手を上げて力弱い泣きっ面で制そうとするのである。

今頃になって当人が事の進行に当惑しだした。が、その一方で、例の内面相克がある。我々の助力を断ろうとする哀願口調の奥に、もっともっと続けてくれと無言の叫びが聞けるのだ。当人ひとりでは事がにっちもさっちも行かないのは本人が一番よく判っている。それに、放っておけばノイローゼになってしまうのじゃないかと思われる程の重症だ。

正直言って、洋の片思いの強さとその気弱さとの取り合わせを第三者が笑ってしまうのは不謹慎だが、当人の外見は鼻筋のきりっと通った眉毛の濃い、男らしくて気持ちのいい顔立ちである。口下手な男であり、正直さにまるきり嫌み無く、優しい気性を持つ。こんな好い奴はちょっと他にいない程だ。我々三人はもともと気が合う仲間だったが、僕と良二は今度の京子林檎の件をつうじて、改めて洋の長所発見に目覚めていった。

又、この一件が無かったら僕は当時、良二の特長も自分自身の性向も含めて浅くしか認識できなかった筈だ。何も無い日常より味付けとしての苦しみに出遭った方が良い、と経験則は言う。我々凡人は、行為を通じてしか理解を深め得ないからだろう。

僕ら三人の性格は、友人同士が何時もそうであるように余り似ていなかった。中で良二がいちばん快活、且つ豪放磊落で外向的、他^{ほか}とも溶け込み易く、割り切り方が早くて物事の処理にストレートに当たるタイプだ。自然と三人のリーダー格である。一方僕は辛辣な口をきく点で、良二と同じかそれ以下でない皮肉さを備え、物見高いが飽きっぽく思い付きを言いつばなしで終わり易いタイプ。気概も体力も活発な良二、そしてやや無口でシャイな洋との中間に居るのが僕で、いわば二人の間をつなぐ媒体役といったところか。

見ていると、洋少年には出身の小学校や中学で目立たぬよう息を潜めて居た、という感があった。自分自身を何処か過小評価するズレが感じられた。で、両親はずいぶん歯がゆい思いだったか知れない。洋にはもっと自信を持てば良いのにと思わせる面が多々ある。こんな少年には、可能な限り度量の広い

娘と好いて好かれる仲になってもらいたい。その娘が引っ込み思案な洋に自信を得させる気がした。良二と僕は、内心そんな風に思っていたが二人ともほくそえむ皮肉屋なので、近くを通るのが怖いほど好きになる女の子とは出遭えなかった。又そういう奇蹟が起こる気配も全く無かったのである。

だからというのではないが、気弱な友人の片恋を一度でいいから叶えてやりたかった。普通なら絶対に明かせない内心の相克を告白してくれただけでも、洋少年の本質は純だ。我々はその人間的な良さを京子林檎へ是非推奨したくなり、乗り掛かった船を何処かに着かせねば気が済まなくなっていた。眞眞の引き倒しみたいなものである。

最終的に、何がきっかけであったかはもう覚えていない。或る日、昼休みの中ごろだったと思う。僕と良二はとっくに購買部のパンとテトラパック牛乳で済ませてしまい、洋の席の傍らに椅子を片寄せて^{たむろ}屯し、弁当包みを開く彼の横であれこれ話し掛けていた。むろん^{テーマ}主題は、京子林檎に対するおっかなびっくりの引け腰ぶりを誇張し^{からか}揶揄っていた。うん、うん、と小さく頷きながら幸せそうに笑う当人は、背丈大柄の割にしんみりしない慎ましくもある噛み方でお袋さんのおかずをつついている。

「よしっ、今から^{じかだんぼん}直談判に行ってくる！」良二が突如、見回すや例のいささか大きめな口を横一文字に引き結び、そう宣言した。^{じかだんぼん}直談判とは何か死語みたいな熟語だが、直接耳にしたらその響きが強烈である。

良二のことだから咄嗟の思い付きでなく、いまや機は熟せり、と観たのだろう。言い放った身が、弾かれたみたいに椅子から立ち上がった。洋と同じほど上背のある身体が、使いこまれた歴史ある木造校舎のすり減った板床をどしどし踏み鳴らして肩を怒らせ豪傑みたいに出ていった。もちろん、行き先は隣のクラスである。

そして、この一文冒頭のシーン、『洋が自席で突っ伏し弁当箱におおいかぶさっていた。背中がワナワナ震えている。実は今さっき、鳥肌立つほどの期待感をぶち壊す絶望に打ちひしがれて一声、「ああっ」と悲鳴的にうめくや飯を食い残しそのまま学制服の腕に顔をうずめている』へと戻るわけである。洋にとって慎ましい飯の最中に不意を襲われゴクリと^{つば}唾を飲み込むことも出来なかったのだろう。

この昼休み良二は、友の^{ほんもん}煩悶に決着をつけるべく単独で隣クラスへのりこみ、京子林檎の前にどっかり腰を下ろした、むろん正面に相対して。良二のことゆえ、既に京子林檎に挨拶し多少の話もするようになっている。それも布石だ。さあこれで僕は急に忙しくなった。隣と自クラス間を往復し、現在進行しつつある巨頭会談のなりゆきをリアルタイムで伝達する大役だ。それも会談を邪魔せぬよう教室外から観察し、真っ当な言葉で事実のみを洋の耳に届けねばならない。言葉は使い次第で残酷なヤイバにもなるが、突っ伏して震える友洋を、良二が戻るまで蚊帳の外に放り出しておくのはもっと酷だ。

さて、良二が椅子に^{またが}跨る真後ろ向きなので、両名の顔と顔の隙間は50センチもない。良二の手は背もたれの上部を握りしめている。両足は長過ぎるタラバ蟹の足みたいに膝小僧が跳ね上がっている。窓ガラス越しで声は聞こえないが良二の表情はよく見えた。京子林檎へ喋りかけるうちに顔がどんどん上気してポーッと赤らみ、幅広い肩は次第に前傾していった。客観的に見て、良二は少しも^{ひる}怯まず、やる気十分で熱意が前傾姿勢におのずと現われている。その熱意が多分、京子林檎の乙女心を金縛り状態にした。で、両名の顔と顔はもっと接近したのである。あれならば低い声で話せば事足りる。それに、京子林檎の方もほっぺたが元々赤いから、近々と向き合うあの二人は、今や室内に横顔が浮かび上がり且つ熱そうな程に赤くゆだって見えた。しかし眺めて居ても、一向に滑稽じゃない。僕の目には美しい永遠のワンシーンとして映った。ふしぎだがその通りなのだ。

良二は相手の目をしっかり捉え、じっと覗き込んで一瞬も休まずに口説きつづけている。大胆な男である。今なにを言っているのか無論外からは分からない。だが、洋の長所を売り込んでいる事は確かで、上気した顔になんと不敵にもうっすら微笑さえ浮かべている。冗談や悪ふざけじゃない、どうか最後まで話を聞いてくれとその顔は訴えている。突然の押しかけ談判にもかかわらず、ターゲットが席を立ってしまわぬので、良二の繰り出す真摯な言葉の流れに耳を傾けているように見えた。というか京子林檎はじっとしている。猛烈な使者の出現に驚き、いささか当惑しているのか。いや、もし仮に僕が今の立場だったとしたら、やはり立てないかも。そうだと当惑といえば、別にもう一人居るのが見えた。それは小中学校が一緒だったという例の幼なじみの男子生徒である。やけにニキビ跡が顔面にデコボコ目立つ生徒で、少し離れた所からそれこそ唾然とした表情が、『これは一体何だ?』とばかり良二の意気込みぶりを眺めている。恐らく良二が入って行くなり強引に追い遣ったか、それともバカ丁寧に頼んでさっさと席を空けさせたのか、その場面をあいにく僕は見逃したが、良二ならば、どちらを選択してもおかしくない。彼独得の意志力と呼ぶべきものが眼差しにあり、それが一旦漲ると、他を圧さずにはおかないからだ。

すでに僕は二往復して洋へ進行状況を告げた。良二が門前払いを食らわず、まだ向こうで精一杯ねばっていること。直接交渉に周りから何の邪魔も入っていないこと。向かい合う双方とも顔は上気しながら、至って落ち着いて見えること。そして京子林檎が何度か控えめに口をひらいたこと。それが恐らく、とても重要な質問の答えであつたらしいこと。なぜなら、それに応じた良二が、大きな身振りを交えてこちらの教室や廊下の方を指さしたり、自分の心臓の辺りを右手で強く押さえたりして見せたからだ。あれは洋の思いを具体的に表現したのではないか。そういう情報を見た限り皆、突っ伏す洋の頭上から伝えた。

ただし僕は、これは如何か^{いかが}と恐れ一つだけ除外し、知らさなかつた。すなわち良二が必死に笑み、一方それへ京子林檎の方が笑み返さないことだ、若しうっかりそう伝えたら、^{おのの}慄き易い洋に、早とちりの誤解をさせ兼ねないと心配したのである。

良二が隣で頑張ったのはずいぶん長い時間のように思えた。が、昼休みの残り時間はそんなに多くなかつたし二人対して居たのはせいぜい十分弱だったろうか。僕は 55 年が過ぎた今でも、その決着の瞬間をまだ隣教室の窓辺で眺めているごとく思い出す。月日が経ってみると後で判る。数少ないがそのまま一生消えない残像もあり得るのだ。

やがて、京子林檎の頬が一度上下にうごくのが分かつた。良二の視線にとらえられた儘コクンと首を頷かせたのだ。承知、僕にはそのように見えた。

すると、アゴの^{えらほね}鰓骨の張った良二の横顔が一回深呼吸するみたいに後退し、それからすぐまた前のめりに戻り、薄ら笑みを消して目の前へ、なに事か確かめるような強い表情で以って一つ聞いた。今までと一瞬に変化した良二の放つ雰囲気。細めた目までがもう笑ってはいなかつた。良二の大きな口が息を詰め、引き結ばれている。そんな面前で、京子林檎がもう一度こっくり、目を逸らさずうなずいた。口はひらかなかつたが、「ハイ」と無言で返事したのも同然、確かにそう見えた。とたんに良二の上気顔が朱を散らしパッと明るんだ。と思うと、元気いい大股が椅子を跨いで立ち上がった。談判が今成立したのだ。僕は直ぐに洋の傍へ戻った。但し手放しの万歳には早い。これは単に一局面の打開に過ぎない。

その何日後だったか、はっきり思い出せないが僕の通学自転車は変速ギアのワイヤーが絡まってイカ

レ、修理に出してあった。放課後、閲覧室入り口で検索カードをパラパラめくっていたら良二が図書館の階段を駆け上がってきた。僕を見つけるや、

「おい、何をしている？忘れたのか、行くぞ行くぞ！」と静かな館内に傍迷惑な大声で急かすのである。一冊借りる暇もなく靴を提げて一緒に階下へ向かった。

「なんで俺たちが二人の前を歩かなきゃいけないんだ？京子林檎のことは洋に任せておきゃあいいだろうに。人の恋路を邪魔する奴はナントかっていうぞ」と、僕は下足箱へスリッパを戻しながら改めてデートのお供に誘う意味をたずねた。

いいから早く靴を履け、と良二は身ぶりで僕をせかして、

「考えてみる。もし洋の口がひらかず緊張で何も話せなかったらどうする。俺たちが近寄って行ってその場を盛り上げてやる、それしかねえだろうが、ん？」まるで、ルルルっつと聞こえるような巻き舌で言った。

要らぬお節介のようだが、成程そう言われてみれば、その見通しにはそうだと唸らせるものがある。口下手な洋のことだ、緊張し上がり切って喋るきっかけを失ったまま彼女の前で黙り込んでしまわないとも限らない。そうなれば結果は今から目に見える如く悲惨だ。万一そうであっても、我々のおこなった助力を恨みはしないだろう。だが洋はトラウマ的にその痛手から一生逃れられまい。その最悪予測は別にしても、あの日、相手が承知したと良二の報告を受けてから洋は、新局面の不安に直面しているのである。養は投げられ吉と目が出た。だが喜びは一瞬の藻屑で、次なる大試練が待ち受けていることを悟ったのだ。つまり、ここから先は洋自身の自助努力でもって彼女の信頼を勝ち得ねばならない、と。それが洋本人にも知れている、と解っているからこそ良二は僕を急かし動員するのである。

急いで靴を履いて表へ出たら、洋が緊張し棒のようにひとり突っ立っていた。図書館のすぐそば、学校正門の四角く高い門柱際で、不安いっぱいの人待ち顔である。僕らを見て彼はちょっと笑おうとしたが、口の脇がピクリと攣ったのみ。次いでその目が僕らの後ろへ流れていった。いよいよ今こそ待ち人現わる、の一瞬だった。

「じゃ、俺たち少しだけ先に行っているからな、ガンバレよ」

わきを通り抜けるとき良二が元気づけに小声でそう言った。洋はギクリと頷いたが、はたして激励が聞こえたか怪しい。緊張の極限にある身は多分、クラシックな二階建て木造校舎群にぐるり囲まれた、奥の中庭に通じる地下道から上がってきた唯一人の姿しか見えていなかった筈。この日の段取りも良二がつけたものである。今日、洋は初めて彼女と待ち合わせをし、正門前から一緒に下校する手筈なのだ。二人とも電車通学だから、まずは国鉄千葉駅辺りまでの道行きが待つ。むろん洋は、京子林檎と直接話すのが今初めてだ。これから何が起こるのか読めず不透明で、何もかもがぶっつけ本番である。

ちなみに当校の女子用制服は、濃紺のブレザーとスカート、そして襟元にのぞく真っ白なブラウスだ。ブレザーの胸前は包みボタンが特徴で、スカートのアクセントは追いかけて襲う縦波だ。校章を女子は左胸のポケット付近に刺すのが常だ。ところでブレザーのデザインだが、女子のお洒落心に言わずと「襟幅が狭いし襟の切れ込み角に丸みがあり過ぎて全体が古臭い」そうであった。むろん男子はそんな乙女のデリカシーを知らない。だが、これに包まれた女子生徒はシックで初々しく清楚さを一層増し輝いて見える。で、今やその姿が洋の方を目指し近付いて来るのだから、相当まぶしかったことだろう。よく気弱な洋がひとりで待ち受けて腰を抜かさなかったものである。

良二と僕はゆっくり先行し、行き過ぎぬ程にコンクリート敷き坂道の途中で立ち停まり、ふり回りふり回りして見上げ、正門からあの二人が現われ出るのを待った。他にも坂を生徒が通っていた筈だが記憶からすっぽり抜け落ちている。我々の心理は、我が子を遠くからじっと我慢して見守る親心のような

ものだった。いたく可愛いからこそ我が子を試練の目にも合わせ、自立させてやりたい一心からである。

「お、やっと出て来たぞ」良二がそう言って僕の腕を引っ張った。

僕らは同時にくるりと校門側から身を背けた。他人の視線を意識させてしまう程じろじろ見て居てはま
ずい。しかし数秒の間に僕は、心配したほど洋が舞い上がってしまった訳でないことを見て取った。目
の残像がそう告げていた。一つには、洋が彼女の隣に並んだ適正な距離である。なにが適正かは議論の
余地もあろうが、相手のバリア意識を圧迫しないで済む隙間とでも言えばいいか。つき過ぎず離れ過ぎ
ず、間違っても肩が触れない、それでいて相手の表情がムリなく目に入るという距離だ。二つには、ご
く短く彼女へ話しかけた際の姿だ。洋の身はまっすぐ正面向きで、首だけを京子林檎の方へ^{よじ}振って、ち
らっと見やるだけに^{とど}留める。洋から何ごとか問うたのだが、意外にもその横顔に笑みを添えている。足
が地につかぬ筈の緊張の割にソフトな感じのする接し方であった。洋もここ一番という時、中々やるで
はないか。三つには、少なくとも外見上おどおどしたり目をキョロキョロ逸らしたりせず、彼女との初
の会話に、もてる注意力を集中させていることだ。口下手な男だが、彼女から返って来た声にこくりと
頷き、数歩の内にまた洋の方から少し首をよじって彼女へなにかを聞く。だから二人が会話している。
この目で見たのだ、間違いない。

僕はすっかり感心し坂を下りながら隣の良二に言った。

「見たか、洋がなにか尋ねて彼女が答えているぞ。あのふたり歩きながら話している。良かったな、洋
のやつ普段より顔が突っ張っているが、あれで愉しそうだ」

「はっ、そう単純に喜ぶのか？」良二は積極的な分、僕より慎重だ。

「どうして。事実だ、喜んで悪いのか」且つ冗談気味に聞いた。「洋の奴、俺たちに^{つゆはら}露払いさせて最後
に良い所だけ攫^{さら}っていくみたいじゃないか。苦しゅうないお殿様だ」

すると良二が意志的な口を尚も平たくして、「もうちょっと様子見だ」と気掛かりを滲ませ断言した。
こういう一面が、軟化しやすい僕より友人思いである。

で、良二と僕は^{いのほな}亥鼻保育所の門前まで一気に下った。そこで立ちどまり、坂を振り向いた。保育所は
丘頂上の校門からつづく坂の突き当たりだ。そこで見返ればあのペアの様子は一目瞭然である。二人が
とる間隔はそのままであった。但し今や、最初の出会いの気詰まりと固さがお互いに少し^解れたようだ。
その証拠は見よ、わずかながらよりスムーズに問い掛けたり問い返されたりしている。横顔にのぞく笑
みの影が両者とも増した。ただ、二人の現在位置はまだ遠く、白い坂道を三分の一も下っていない。あ
の二人、坂途中で停まっている訳ではない。けれど、^{たたず}佇みながら下っている如き不思議な歩みと称す
ればいいか、二人の周りに時間がゆらゆら^{たゆた}揺蕩いつつ流れている。一歩ずつ繰り出すその歩みが、申し
合わせた如く同じスローペースである。

「なあ良二、アンリ・ルソーの描いた散歩風景みたいだ」僕はそう口走った。

すると良二が薄い学生鞆で僕の後頭部をかるく^{はた}叩いた。参考書で鞆をパンパンに重くするタイプでは
ない。もっとも僕の方の方がもっと薄っぺらである。

「なにポカンと見ているんだ。ハハハ、とっとと行くぞ」

なんだよ、もう少し様子見なんて偉そうに言ったのは誰だ。たった今まで自分だって細い目をもっと
細めニマニマしてたくせに。そういう^も揉み上げ^あ面は笑う山賊もどきだ、知っているか？しかし、良二
はもう僕を^{うなが}促がして今井クリーニング店の角を^{かど}曲がり、あの二人の心配なんかしていない風で大股で
ずんずん進んでゆく。却って僕のほうが後方に心残り、もう少し洋の踏ん張りを見届けねばとの気持
が強まっていた。視界から友人二人の姿が消えたら洋が焦ってしまうのではあるまいか、と。

「お、ちょっとこれ見てみようぜ」良二がのんびりとそう言って、百メートルばかり先の文化会館前で立ち止まった。催し物の掲示板に本日分の案内が出ている。良二と洋と僕の三人してよく下校途中、入場料なんか払えるかと言いついて文化会館に潜り込んだものである。この日も車寄せの斜傾路から正面玄関をくぐり堂々と勝手知ったる大ホールを覗いた。会場前の受付に誰も居ず、マイクの音がかすかに大扉をもれ出るのは中で催し物が既に始まっているのだ。良二と僕はホール最後の最後列、つまり一番高い所にある後方扉の一つを選んで場内の誰にも気付かれずに滑りこんだ。ここは我々の学校もクラス別対抗の合唱コンクールをやったことのある場所だ。俯瞰すると、ざっと八分目の入りで大ホールを埋める大人数である。遥かの底に見える舞台では、演壇前でひとりの女性が聴衆へ向かい熱く語っている。おそらく三十代半ばの婦人で原稿無し、個人体験事例発表のような内容と思われた。

良二と僕は通路階段をすばやく下り、真ん中あたりの空席に身を沈めた。舞台正面左右に大きな祝い幕が四本垂れかかり、何かの団体の大会だ。これだけ多くの人々がじっと聞き入る発表を無料で味わえる幸運に、僕と良二はニッと笑みあった。

ところがだ。どうしたのか直ぐに演壇上の女性がつかえ始めたのである。そして見る見る絶句した。どうやら、頭の中に組み立ててあったストーリーが突然途切れてしまったらしかった。彼女が身もたえする如く絶句の苦しみから逃れ出ようとして次の言葉を空しく探す様子は、こう言うては不謹慎だが、先の読めぬ恐ろしい見ものだった。婦人の必死な形相とその雰囲気はただならぬ緊張を一瞬に会場全体に漲らす結果となった。

すると場内で誰かが叫んだ。マイクの無い聴衆席からである。一人だけではない。一声が、三声四声、そして何とも言えぬ多くの声々が絶句する壇上の婦人へ、「ガンバレ！ここで頑張れなくて教えをどうする！」というような意味を口々に発した。

それらの声援を受けた演壇の婦人は、声と気力をふりしぼり何か言った。泣き声に近い叫びだ。と思うや彼女の手をまさぐられて数珠が現われ出たのである。左右どちらかの手首に最初から掛けていた物らしい。それをジャラジャラ鳴らしながら額よりも高く捧げ上げ、お題目のようなものを唱え出した。自分自身に喝を入れる感じである。

そして次の一瞬、良二と僕は思わず自分の目を疑った。

聴衆全員がその場にザッと立ち上がったのだ。全員がジャラジャラと鳴らす数珠を手をまさぐり上げ、一斉にそろったお題目をワンワンという地響きじみる轟きで念じ出した。坐ったままなのは僕と良二だけである。見よ、僕らのすぐ斜め前の通路に、六歳ぐらいの子供までが両足をふんばり出て子供用の短い数珠を手で揉み、これも熱狂し念じるではないか。場内一同はいわば歓喜に包まれ一瞬にして盛り上がり、その中、言葉につまっていたあの婦人の声がマイクに乗って復活し、教えのありがたみが我が身の血肉に成っていると訴え掛け、それを受けた聴衆がますます感じ入り、恍惚として唱和し続けるのだった。

「やばい、これは」魂消た良二が僕の耳元にささやいた。聞き返すまでもなく僕も腰を浮かせ二人ほうほうの体で大ホールを逃げ出した。あんな熱狂集団と出くわしたのは初めてだ。中にいたのは僅か数分だったが、いわゆる新興宗教団の強烈な一体感を離れてみたら、煤煙や車の排気ガスで濁った外気ですら胸に心地よかった。車寄せ脇の植え込みにある青い植物や木々の葉が日に透けて光り、ひじょうに新鮮に見えた。

文化会館おもての一段高い場所から、長洲町と亥鼻町との町境に当たる眼下の通りを眺めた。そこは我々の通学路でもある。向かい側に亀の湯と増田材木店が見える。その右隣が田中酒店で、ちょうど洋

と京子林檎がその前まで来ていた。あの二人はやはり時間の流れに取り残されたようにゆっくり進んでいる。お互いが自身の心の中を覗き、異性と歩を共にした時に生じる、あの初めて空を飛ぶ感覚を味わっているようだ。やがては忘れてしまい勝^{がち}な繊細な感情だが、今それが二人に溢れている。洋は今や位置を入れ代わって京子林檎を路肩側にして、彼女を車の通行から守っているのであった。

「いい感じだな、洋の顔が引き締まって見える。臆病を忘れたみたいだ」と、良二が隣でつぶやいた。そこに皮肉な調子はなかった。

「うん、そうだな」その言い方に感心して僕も応じた。そして僕はもう一度眼下のふたりの歩みぶりを見てからこう言った。「洋の願いを叶えてくれた京子林檎も良いな。あの子、とても偉いよ」

洋は、我々が見下ろしている高みに気付かず、エスコートに専念している。小鼻を膨らませ気の張った顔が、彼女へまぶしげに笑み返し何か言われる度に頷く。一方、彼女はカバンを前に移して両手で提げてみたり喉もとを仰がせたりする。二人の見掛けは屈託なげだが、心の中は春の嵐のような突風が様々な思いの明滅で吹き過ぎている。スポーツ用具店弘武堂^{こうぶどう}の角を市役所の方へ折れていった。良二と僕はほぼ満足し、後ろ姿を見送った。

ところでその後の記憶が、何も映っていない輝くスクリーンのごとく僕の中では空白である。だから、これ以外の話は僕の勝手には書けない。以上が、過ぎてしまえば僅か五十五年ほど前で、我々が十代半ばを過ぎた頃の、或る数日の出来事である。